

5. 学校において特に予防すべき感染症の分類

第一種(感染症予防法の一類感染症と二類感染症)			
疾病名			出席停止期間
エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱、急性灰白髄炎、ジフテリア、痘そう、南米出血熱、重症急性呼吸器症候群、中東呼吸器症候群、特定鳥インフルエンザ			治癒するまで
第2種(飛沫感染するもので、学校において流行を広げる可能性が高い感染症)			
疾病名	潜伏期間	キーワード	出席停止期間
インフルエンザ	平均2日 (1～4日)	悪寒、頭痛、高熱で発病。 急激に発病し、流行は爆発的	発症後5日を経過し、かつ解熱後2日間をけいかするまで
百日咳	主に7～10日 (5～21日)	咳き込んだ後、ヒューという笛を吹くような音を立てて息を吸う特有な咳。 連続性・発作性の咳が長期間にわたって続く。	特有の咳が消失するまで、 又は、5日間の適正な抗菌性物質・製剤による治療が終了するまで
麻疹 (はしか)	主に8～12日 (7～18日)	結膜炎、くしゃみ、鼻水など共に発熱し、コプリック斑が見られる。 再びの高熱と共に赤い発疹(耳の後ろから顔面→全身)。 発疹消失後、褐色の色素沈着。脳炎の合併	発疹に伴う発熱が解熱した後、3日を経過するまで (症状により更に長期に及ぶ場合もある)
流行性耳下腺炎 (おたふくかぜ)	主に10～18日 (12～25日)	耳下腺の腫脹。無菌性髄膜炎の合併。 成人までの罹患では、精巣炎、卵巣炎の合併に注意。	耳下腺、顎下線又は舌下腺の腫脹が発現したあと5日を経過し、かつ全身状態が良好になるまで
風しん (三日はしか)	主に10～15日 (14～23日)	発熱と同時に発疹。リンパ節(頸部・耳の後ろ)の腫脹と圧痛。	発疹が消失するまで
水痘 (みずぼうそう)	主に14～16日 (10日未満～21日)	紅斑→丘疹→水疱→膿疱→かさぶたと変化 発疹は、体と首の周辺から顔面に生じやすい。	全ての発疹が痂皮化するまで
咽頭結膜熱 (プール熱)	2～14日	高熱、結膜炎、咽頭炎が主症状。 プールを介して流行することもある。	主要症状消失後、2日を経過するまで
結核	特に6ヶ月以内(一様ではない)	全身の感染症ではあるが、肺に病変を起こすことが多い伝染疾患	感染の恐れがないと認められるまで(医師の判断による)
髄膜炎菌性髄膜炎	主に4日以内 (1～10日)	高熱や皮膚、粘膜の出血斑や関節炎等の症状が現れ、その後に頭痛、吐き気、精神症状、発疹、頸部硬直などの髄膜炎症状がみられる。	症状により学校医等において感染のおそれがないと認められるまで
第3種(学校教育活動を通じ、学校において流行を広げる可能性がある感染症) 学校長が学校医と相談をして学校感染症としての扱いをすることがあり得る病気			
疾病名			出席停止期間
腸管出血性大腸菌感染症、流行性角結膜炎、急性出血性結膜炎、コレラ、細菌性赤痢、腸チフス、パラチフス、その他の感染症 溶連菌感染症、感染性胃腸炎、マイコプラズマ肺炎、ウィルス性肝炎、手足口病、伝染性紅斑(リンゴ病)、ヘルパンギーナ、アタマジラミ、伝染性軟属腫(水いぼ)、伝染性膿痂疹(とびひ)など			伝染の恐れがないと認められるまで